

会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和7年度 第2回キャリア教育推進委員会		
事務局 (担当課)	学校教育課 電話042-704-8918 (直通)		
開催日時	令和8年2月5日(木) 15:00~17:00		
開催場所	市民会館 第2大会議室		
出席者	委員	18人(別紙のとおり)	
	その他		
	事務局	11人 学校教育課 6人 教育センター 3人 教育相談課 1人 支援教育課 1人	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	0人
議題	1 開会 2 教育長あいさつ 3 委員自己紹介 4 報告 (1) 令和7年度の取組と次年度の方向性について (2) 学校行事を活用したキャリア教育 (3) 相模原市のキャリア教育を活かしたコミュニティ・スクール 5 グループ協議 「子どもたちに未来を切り拓く力を育むために私たちができること」 6 次年度の開催について 第1回キャリア教育推進委員会 令和8年5月下旬頃 第2回キャリア教育推進委員会 令和9年2月上旬頃 7 その他 8 閉会		

令和7年度相模原市キャリア教育推進委員会 出席者名簿

氏 名	所 属 役 職 等	出 欠
藤田 晃之	筑波大学人間系 教授	出席
原 晋	青山学院大学地球社会共生学部 教授	出席
榎本 幸良	相模原市社会福祉事業団	欠席
布施 昭愛	相模原商工会議所	出席
鎌倉 慎一郎	公益社団法人 相模原法人会	欠席
河合 優輝	公益社団法人 相模原青年会議所	欠席
佐々木 学	相模原公共職業安定所	出席
中村 岳彦	相模原市P T A連絡協議会	代理出席
浅倉 勲	相模原市立小学校長会	出席
及川 秋人	相模原市立中学校長会	出席
農上 勝也	学校教育部長	出席
小中 信幸	区政推進課長	出席
奈良 美幸	高齢・障害者福祉課長	欠席
土元 健一郎	こども・若者政策課長	出席
田内 聡	産業支援・雇用対策課 総括副主幹	代理出席
山崎 則仁	創業支援・企業誘致推進課 総括主幹	代理出席
沖本 健二	教育総務課長	出席
西内 一裕	支援教育課長	出席
折原 奈帆	教育相談課長	出席
菅原 勝	学校教育課長	出席
北村 綾	教育センター所長	出席
今野 裕之	生涯学習課長	出席

議 事 の 要 旨

[議事内容、質問及び主な意見] ●委員 ○事務局 □司会

1 報告

資料1を基に、事務局より以下の内容について説明

- (1) 令和7年度の取組と次年度の方向性について
- (2) 学校行事を活用したキャリア教育
- (3) 相模原市のキャリア教育を活かしたコミュニティ・スクール

[質問・意見等]

(中村委員)

- キャリア教育を通じ、子どもたちのために様々な取組をしていただいていることを、資料・映像から確認できた。1年1年成長していく子どもたちを支えていただいていることに感謝したい。

2 指導・助言

(原委員)

- 当時、学校教育部長だった現細川教育長が、この会議体を作り、様々なことを話し合ったことをついこの間のことのように覚えている。当時、市教委の上層部で作ったこのプログラムが、果たして各学校にまで浸透するののかということに疑念を抱きつつも、興味津々であった。本日、キャリア教育の理念をきちんと現場に浸透させている姿を説明や動画等で確認することができ、涙が出るほど嬉しく思っている。
- 近年、大学での指導においては、認知能力の育成もさることながら、非認知能力の育成をしていかなければならないと考えられている。先ほど、生成AIを使って資料を作成したと説明があったが、これからの時代はただ物事を暗記するだけではなく、自ら考えて行動する力を育成するなど、非認知能力の育成こそが、これからの教育に求められるものであると考える。
- ある論文では、非認知能力の向上が認知能力の向上につながるという成果が報告されている。自ら考えて行動するという思考をもつことができれば、様々な学びに対して主体的になり、結果として、認知能力に結びつくというメカニズムになっているものと理解している。
- 本学の陸上競技部では、A4の1枚の目標管理シートを作成し、毎月目標管理ミーティングを行っている。目標管理シートには、1年間の目標、毎月の目標及び現状を記載できるようになっており、目標には3～5項目程度、できる限り具体的な数字を記載するように指導している。ミーティングでは、3～5人のグループを作り、そのシートを使って議論をするが、その議論の場では、「なぜだめなのか」をフィード・バックするのではなく、「どうすればよいか」をフィード・フォワードさせるようにしている。
- 現在、私は、このミーティングに参加していない。このミーティングを取り入れた当初は、学生が議論したことに逐一コメントし、議論の仕方について指導したこともあったが、ある時、学生が喧々諤々と議論している様子を見て、これからは教え込む教育ではなく、見守る教育にシフトしようとするに至った。このようなミーティングができるようになるまでには、7～8年くらいの時間を要した。このような状態になれば、いわゆる支える教育、答えを出さない教育ができるようになる。
- 毎年、学生が入れ替わるのに、どうして積極的な指導なしに同じ効果を得られるのかと質問されたことがある。その答えは、それが伝統になるからである。学校に文化が根付けば、何をせずとも、自ずと同じような教育が施せるようになるものである。相模原市においても、キャリア教育の取組が伝統となり、今後、よりよい教育につながってくると感じている。
- これまで、スポーツや教育、ビジネスなど、様々な場で、「心・技・体」という言葉を聞くことが多かった。しっかり話を聞きなさい、整理整頓をしなさい、整列をしなさい、ごみを拾いなさいなど、心を磨くことに重きを置いてきた風潮がある。これについて、否定はしないが、私は「技・体・心」という言葉を使っている。つまり、正しいメソッドで実践するからこそ、体が育まれ、自信が生まれ、心が磨かれるというサイクルが生まれるものと思われる。
- 誤ったメソッドを何度繰り返したとしても、人の能力はなかなか伸びない。相模原市のキャリア教育の取組は、児童生徒に与えられた9年間という限られた時間の中で、正しいメソッドを繰り返すためのフレームづくりをしたことに他ならないと考える。

- 昨日、日銀の植田総裁と対談をした。その際、大学でどのような指導を行っているのかを問われ、私がお答えしたのは、まず、子どもの実力をきちんと把握するということである。その上で、実現可能な半歩先の目標を設定させ、それを達成する成功体験を積み重ね、何度も何度も成功の喜びを感じられるようなメカニズムを作ることを意識しているという話をした。
- 植田総裁からも同じような経験があるという話を聞いた。大学で研究をしていた際に、「最初から難しい論文を書こうとする必要はない。小さな進展の積み重ねが、やがて大きな研究になり、成果を挙げる論文になるという指導を受けたことがある。」というお話であった。
- 定性的評価と定量的評価について、定性的評価を実施するに当たり、定量的な評価の影響を過大に受けないようにすることが大切であると考え。人間の五感を働かせながら、先生方が子どもたちの様子を見取るとき、五感を信じながら評価することが、望ましい定性的評価につながるものと思う。

3 グループ協議

[Aグループ]

(菅原委員)

- アントレ・プレナー事業の様子を教えてください。議論を進めたいと思う。

(山崎委員)

- アントレ・プレナー事業は、小学校高学年を対象に行っている事業で、子どもが起業家として、1つの会社を立ち上げ、収益を出すまでのプロセスを、4日間で体験するプログラムとなっている。例年、子どもたちが実際に作ったものを、アリオ橋本で実際に売る体験を行っている。子どもたちが企業や会社に触れ合う良い機会となっていると考える。
- 私たちの課では、子どもたち向けの商品やロボットを扱っている会社と関わることもたくさんあり、そのような会社と子どもたちがつながる機会を作ることが大切だと考えている。

(菅原委員)

- アントレ・プレナー事業に参加した子どもたちの様子はどうであったか。

(浅倉委員)

- アントレ・プレナー事業に参加した子どもは、日頃、学校生活の中でも面白いものを探して歩いているような特徴のある子どもが多い。学校では、実際にお金を使って学習することはできないので、学校外において、このようにリアルな経験ができることは貴重だと考える。

(西内委員)

- 学校は、社会に出るための基礎・基本を身に付ける場というイメージがあるが、アントレ・プレナーや出前授業などを通じて、リアルな世界を体験することができるのは、貴重なことであると思う。自分が学生時代、そのような経験ができたのは、アルバイトだった。その点、今の子どもたちには、前述のような学びの場があることについて、とても価値があることだと思う。
- 特別支援学級の子どもたちがどのような場で、社会に出るための経験を積み重ねられるかと言えば、それは自立活動が中心になる。自立活動の中では、お店屋さんごっこをしたり、町のお店に買い物に行ったりしており、キャリア教育に通じるところがたくさんあると考えている。

(北村委員)

- 10年以上前になるが、私の担当していた学級（通常級）に在籍しながら特別な支援を要する児童がいた。最近、その児童の母親と連絡を取る機会があり、現在の彼の様子を聞いたところ、しっかりと仕事に就き、働くことができているということであった。最近、偶然、その彼を電車で見かけることがあり、当時から成長し、仕事に就けるまでになったのだと感慨深いものであった。
- 当時、その彼と同じクラスにいた別の児童は、その彼がきっかけで、支援教育に興味を持ち、支援学校の教員になった。このことについて、連絡を取った彼の母親は、「私の息子は、周りの子どもたちから様々な支援・影響を受けて育ってきた。そのような中、私の息子が別の子に影響を与えて、結果、支援学校の先生になってくれたことは、涙が出るほどうれしい。」と話してくれた。
- この子がクラスにいたことは、周りの子どもたちの成長にもなったし、私自身、教師としての礎

にもなった。

(藤田委員)

- キャリア教育という言葉は、時代の先端を行くような印象を受けるが、子どもの自立を支援する教育であり、特別支援教育が先輩と言える。特別支援教育の中で行われる自立活動をすべての子どもに保障しようという考え方は、キャリア教育のスタートである。そのような意味では、これまでの特別支援教育を支えてくれた先生方の蓄積は大きいと感じる。
- 特別な支援を要する子どもたちは、ただ支援を受けるだけでなく、周りに影響を与えているということについては、私たちが生活している世界では普通のことである。学校という組織の中では、特別支援学級、特別支援学校といった形で区別をしてしまう状況があるが、大人の世界の中ではそのような区別なく、一緒に生きているのである。そのような中で、学校においても、特別な支援を要する子どもたちと共に生きる機会を保障していくことが大切であると感じる。

(菅原委員)

- ここまでの話を受けて、保護者の立場でどのように感じるか。

(中村委員)

- 親の願いとしては、子どもに幸せに生きてほしいということである。また、その子どももやがて大人になっていくので、社会で自立して自分の子どもを立派に育ててほしいと願っている。このような環境を整えるためには、学校、家庭、地域が三位一体となり、企業力も借りながら教育に当たることが大切である。
- 私が強く思うことは、学校、家庭、地域、企業が協力しながら子どもたちを育てていく必要があるということに対して、多くの大人の理解が欠かせないということである。しかしながら、今の大人たちには、自身の生活に時間的なゆとりがないということを感じている。また、近所づきあいも希薄になっており、どうやったら、様々な大人に関わっていただける環境を作っていけるのか、ということを考える必要がある。

(菅原委員)

- 多くの大人が子どもたちの教育に関われるようにすることが大切との話があったが、生涯学習課としては、どのように感じるか。

(今野委員)

- 20年ほど前に、私も担当者として子どもアントレ・プレナー事業に参加した経験がある。当時は、会社の経理役の子どもが、銀行役の子どもから融資を受けに行った際、お金を借りることができず、泣きじゃくってしまったり、けんかをしてしまったりするような場面があった。キャリア教育が進んできた今、子どもたちの様子がどのように変わってきたのか、ぜひ見てみたいと思った。
- キャリア教育に対して、これだけ力を入れているということ、ぜひ地域にも発信していただきたい。小・中学生が家庭にいない世帯の方については、なかなか学校に近づけず、学校でどのような学びをしているのかがわからないところもあると思う。学校でどのようなことに困っているのかなどを地域の方に伝えて、協力を仰いでいただきたい。

(菅原委員)

- 今野委員からの話を受け、学校の立場としてはいかがか。

(浅倉委員)

- 校長会の関東ブロックの研究大会で本市のキャリア教育の取組を発表した。縦の接続、横の連携の取組について伝えたところ、校種間や地域との連携を一体的に捉え、大人がつながることで、取組を進めていこうとする考え方について、相模原らしいと大変評価された。
- 学校においては、キャリア教育が教育の中核にあるということの理解が、進んできている。例えば、これまでは、学校教育目標がただ設定されているだけになっていた様子もあったが、近年は、教職員が学校教育目標を意識している様子が感じられる。このように、大きな目標に基づいて、様々な教育活動をしているという意識が、教職員に醸成されており、これはキャリア教育の

成果であると感じる。

(沖本委員)

- アントレ・プレナーについて、子どもたちが世の中にある色々な職業に触れる機会を設けることが必要だと思う。また、見るのと体験するのでは、教育効果は全く異なるものと思われるが、生徒全員がたくさんの職業を経験するとなると、なかなかそれだけの機会の創出は難しい。そこで、メタバースでの疑似体験なども通じて、リアルと往還するような教育ができるとよいのではないかと考える。生の体験に近いことを、たくさん体験できるような方法はないだろうか。

(藤田委員)

- 京都市や仙台市などでは、お仕事体験館のようなものを市教委が作っている。いくつかの基本プログラムがあり、学校の選択に応じながら、その学校の子どもたちに合った体験ができるよう工夫されている。京都には伝統産業があるものの、子どもたちは伝統産業にあまり興味はない状態から体験をスタートすることが多い。しかしながら、体験を進めるにつれて、その面白さに気づき、顔色を変えて体験を迫るようなこともあるようである。閉校した学校の空き施設などを有効活用して、このような取組を進めていくのも一つの方法ではないだろうか。
- メタバースについても、最近ではAIの発展により、良く作り込まれているものが出てきたので、その世界と現実世界をどのように往還していくかということが大切である。
- 一方で、AIについては、どうしても人が作った計算された世界の中に留まるものであるから、逸脱した経験をするのは少なく、人が想定した範囲内の経験に留まる。先ほど、アントレ・プレナーの体験で泣きじゃくっていた子どもがいたという話があったが、このようにうまくいかない経験こそが正にリアルな経験であり、このような経験をするのも重要である。
- 近年、大人たちは子どものすることを何でもほめ、認める風潮にあるが、その教育効果には限界があるものと考えられる。時には、子どもたちの浅はかな考えに対して、大人が眼前に立ちはだかり、「それは、すでに検討済みである。」と伝えるなど、現実世界の厳しさを伝えることも重要と考える。
- リアルとメタバースの体験をどのように組み合わせていくのか、ということについて、今後とも考えていく必要がある。

(沖本委員)

- 教育DX推進課や教育相談課が進めている事業の中で、メタバース活用のための費用を確保することができた。今のご助言を活かしていきたい。

(藤田委員)

- ChatGPTなどの生成AIについても、数年前まではデータベースが古く、誤った情報を提示するなど、あまり使い物にならない印象であったが、近年はその様子が劇的に変わってきている。メタバースについても、数年前の物とは変わってきているので、子どもたちの教育に活かしてほしい。

(山崎委員)

- 自分の子どもは、スマホ、ゲームばかりに興じている様子があり、本当に社会的自立に向けた力を育てているのかということに心配がある。今の中学生、高校生は、このままで大丈夫なのだろうか。

(藤田委員)

- 確かに、スマホ、ゲーム等、子どもがバーチャルの世界で生きている様子を見て、心配になる気持ちはわかる。一方で、社会の在り様が、これまでと変わってきており、バーチャルの世界などをベースにしながら社会が構築されているので、むしろ、それを肯定的に捉えていくという側面も必要だろう。
- ただ、どんなにスマホ等を通じてバーチャルの世界にのめり込んでいたとしても、人は社会的な生き物なので、やがて人との接点は欲しくなり、空しくなり、自分だけの世界で満足できなくなる。すると、友達に話すなど、やがて人のコミュニティに必ず返ってくる。
- 中高生の時期は、スマホを禁止したところで、色々な目をかいくぐって使うことはわかってい

る。禁止することに効果がないとすれば、いかにその様子を見守りつつ、人の形成する社会には、もっと広い世界が広がっているのだということに気付かせていくことが大切であると考え

(中村委員)

- スマホの使い過ぎといった問題は、各家庭が責任をもって考えていくことである。しかしながら、学校ではその使い方をめぐり様々な問題が起こっているため、保護者が主体的に問題解決に向けた子どもへの働きかけをしていく必要がある。

(西内委員)

- 先ほど原委員から半歩先の目標設定をすることが大切というご示唆をいただいた。スマホの活用の仕方なども正にそうだと考える。子どもの実態を把握した上で、実現可能なもう少し良い使い方を考えるという経験をさせることが大切だと考える。

[Bグループ]

(農上委員)

- キャリア教育について、どのようなことをそれぞれのお立場で進めているか。

(及川委員)

- 本校では、学校教育目標「**懂れ 共に はじめの一步**」を大切にしている。これは、キャリア教育の、「つながる力」と重なる。この目標を意識して、子どもたちにいつも話しかけている。生徒に「学校教育目標を知っていますか」というアンケートをとったところ、前年度よりも14%も上がっていた。学校教育目標に対しての認知度が上がったことが実感できた。
- シビックプライドについて、「**市民としての誇り**」をもつことが、学校に対して誇りをもつことにもつながり、自分にも誇りをもつことにもつながると感じている。指導をする上では、子どもたちへの褒め方についても意識している。結果ではなく、努力したプロセスを褒める。例えば、友だちに教えて友だちがわかるようになったら、「あなたが教えてくれたから友だちがわかるようになったんだよね」と自己肯定感を高められるよう、言葉かけを意識している。

(農上委員)

- 各課の取組みはいかがか。

(小中委員)

- 私の課は、市民局に属し、乳幼児から老人までを対象に施策を講じている。子どもたちを対象にした事業については、「消費生活について」をテーマに、「契約の方法を考える」、「ICTのリテラシーを考える」といった事業などを行っている。具体的には、消費生活アドバイザーが学校に出向いて、出前授業を行っている。
- 文化芸術の面では、相模原市民文化財団にご協力をいただき、落語家の方に学校に行って落語を披露していただく事業を行っている。この事業の中では、落語家に「なぜ落語を披露することになったのか」を語ってもらっており、キャリア教育を意識した内容となっている。市長部局では本課が取りまとめの部署であり、子どもたちに必要な事業を実施していると考えている。

(田内委員)

- 産業支援・雇用対策課では、小中学生を対象に、市内企業の取組を紹介する取組を行っている。昨年、一昨年度は中学生・高校生を対象としていたが、今年度は小学5年・6年生へと対象を広げ、3倍以上の参加があった。小学生は124名の参加で、中学生・高校生の参加もあった。キャリア教育について考える機会になったと感じている。
- 保護者の方の興味・関心も高まっている様子が感じられている。また、小学生については、高学年くらいが、自分のキャリアを考え始めるよい時期なのだと感じている。来年も引き続き実施していく予定である。

(布施委員)

- 相模原商工会議所では、子どもに対する取組はないので、大人の方に着目している。いわゆる経産省が提唱している社会人基礎力を伸ばしていけるようにと考えている。人生100年時代となっており、雇用の継続がライフサイクル上でも幅広になっていると感じている。

(佐々木委員)

- 職業安定所も基本的には大人を対象としており、学卒、中卒、高卒の方を対象としている。中卒の方の利用はほとんどないが、キャリア教育の一環として、中学校に対して出前講座を実施し、職業についての話をするという取組を行っている。
- また、中学校へはマナー講座を行っており、8校から出前講座の依頼があった。
- 秋には、発達に課題のある生徒さんを対象に、職業自立のためのセミナーを開催しており、学校や会社の方をパネラーにお迎えして、困っていることなどについて話してもらっている。今年で4年目の取組となり、今後も毎年の実施を予定している。
- これまでは、中学生や高校生、大人を対象にした活動を実施していたが、今後に向けて小学生を対象にした取組の検討を始めた。ハローワークに関する認知度が、大人の方に対しても低くなっているため、認知度を上げるための取組を考えている。例えば、さくらまつりで出店する際には、「OHBYカード」というカードゲームを行い、様々な職業について知ってもらった。大人たちにも「ハローワークがこんなことをしている」と知ってもらう機会になればよいと思っている。また、小学生に対して出前講座を行うもよいのではないかと考えている。

(土元委員)

- 子ども若者未来局においては、子どもに関する施策について、広く意見を聞くことを大切に進めている。先日、光が丘小の子どもたちと「旧青葉小に複合施設を作ろうとしていること」について話をした。その際、「室内でどんなことをして遊びたい？どんなことをしたい？」などと、具体的に尋ねることができ、子どもたちは真剣に考えていた。「大きな子どもと小さな子どもが一緒に遊ぶと危ないから、ルールを作った方がいい」や「ボルダリングの壁を作ってほしい」など、多くの意見を得ることができた。
- 子どもたちが、自分たちの意見が反映されていることが分かると、民主主義の担い手としての意識を育めることから、そのような取組を意識しているところである。

(農上委員)

- 子どもたちの意見を大人が真剣に話を聞いてくれている、ということが大切なのだと改めて感じる。

(折原委員)

- 教育相談課では、19歳までの方の教育相談と、不登校生徒への支援を行っている。一番多い相談内容は不登校についてで、次は発達についてである。
- 保護者の方の話を伺っていると、この先どうなっていくのか、学校との関わりが薄いことに関して、不安が高まっている状況が多いと感じている。改めて学校は、キャリアに触れる機会が多いのだと実感している。
- 教育相談課では「職業について考える」場を設け、お笑い芸人の方に来てもらい、講演などをしていただいている。このような場をもつことで、自身の将来について考えられるようになった子どももいた。
- 教育相談課の職員も、公共職業安定所主催の、発達に課題のある児童生徒の職業的自立を考える講座に参加させていただき、勉強している。
- 「アクションプラン」について、不登校の児童生徒が少しでも不安を払拭できるようにという思いである。関係機関においては、いろいろな場面で不登校の児童生徒に関わる場面があると思うが、ぜひお力添えをいただきたい。

(農上委員長)

- 改めて、学校だけではなく、学校と学校外の取組がつながることが大事だと感じるが、皆様はどのようにお考えか。

(及川委員)

- 学校と地域との連携が大切だと感じている。学校における教育の場に、地域の方々に来ていただき、シビックプライド、地域に対する誇りを話してもらうことや、「学校はこんなことをやっているんだな」と、地域の方に知ってもらうことが大切だと考えている。

(農上委員)

- 出前講座もあるが、学校での位置付けはどのようになっているか。

(及川委員)

- 総合的な学習の時間に来ていただき、色々な場面で職業などについてお話をいただいております、弁護士の方にお話しいただくこともあった。コロナ禍は職場体験に行くことができなかったのですが、学校に来ていただき、講話をしていただくことが多くあった。

(農上委員)

- それでは、学校への要望等はいかがか。例えば、「学校とこんなことができればいいな」などの要望はあるか。

(土元委員)

- 子どもたちから意見聴取できる機会があるとよい。通学路の見直しや地域にある公園のあり方、児童館利用のルールなど、子どもたちの声を聞くことができるとよい。現在、学校から子どもたちを紹介してもらい、意見をもらうといった取組はしているので、子どもたちにとっても、意見を出すことにどんなメリットがあるのかを説明できるとよいと思う。

(及川校長)

- 自分たちの意見を聞いてもらえて、自分たちの意見が反映されると、自己肯定感・自己有用感も高まっていくと思う。ぜひ連携させてもらいたい。

(農上委員)

- 私も光が丘小の話を聞かせてもらった。A&Aの関係で「3つの公園ができる」という話になったとき、「1つではなく3つの公園ができるので、こっちのほうがいい公園になる」など、市長に提案する機会があった。「こんなのぜんぜんだめだよ」でもいい。じっくり話を聞いてくれることが大切なんだなと、光が丘小の話を聞きながら感じた。

(農上委員)

- 子どもたちの姿からお感じになったことについては、いかがか。

(田内委員)

- 職業体験 EXPO には、消防・保育関係なども含め、建設、動物、美容院、工学分野など、10社に参加していただいた。子どもたちは、参加希望のブースやそうではなかったブースにも参加していた。子どもたちは、「こんな仕事があるんだ」という気付きにや、「楽しかった、おもしろかった」という感想をもらうとともに、保護者からも「とてもよかった」、「知らない世界を知ることができた」、「よい機会となった」という話もいただいた。

(農上委員)

- 出前授業についてはどうであったか。

(佐々木委員)

- 「職業がこんなにたくさんあるということを知ることができた」という感想があった。マナー講座を通じて、「友達同士の会話と知らない大人との会話では、こんなことが必要なんだということを知った」という振り返りもあった。

(農上委員)

- 子どもの姿から、いろいろな話をいただいた。学校でできることは限られていて、学校外でしか出会わないものに出会える、広い世界に出会わせてもらう、ということが大切なのだと改めて感じた。土元委員からもあったが、子どもが主体となる取組が増えていると感じた。

4 指導・助言

(藤田委員)

- 資料1の7ページ「自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合」について、令和2年度から令和3年度にかけて、グラフは右肩上がりである。これは新型コロナウイルスの感染拡大により、学校教育の実施が危ぶまれていた経緯からすると、驚異的な結果である。また、「将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合」について、あまり伸びていないという説明があったが、全国的には、この割合は当時、非常に下がった状況にあり、このことに鑑みれば、相模原市の結果がどれだけすごいことかということについて自覚し、先生方に自信と誇りをもっていただきたい。
- 相模原市キャリア教育パンフレットを見ると、グランドデザイン、幼保小連携、小中一貫教育、キャリア・パスポートなどの取組が記載されている。相模原市民の方々は、キャリア教育を進めるために、こんなにもたくさんの方々のことをやらなければならないのかと、負担感を抱かれることもあるかもしれない。今後、そのような見方をどのように変えていくかということが課題である。
- この見方を変えるヒントは、資料1に記載されている。それは、地域と学校が、どのような子どもたちを育てたいかというビジョンを明確にした上で共有し、そのビジョンに近づいたかどうかを検証しながら改善を図るサイクルを構築するということである。キャリア教育の取組は様々考えられるが、その根底に流れるのはめざす子ども像の実現であり、これを実現するための協力については、出し惜しみなくしていきましょうと共通確認することが大切である。
- 本日、行事の振り返りを行う場面の動画を見せていただいたが、活動型のプログラムにおいても、どのような力を身に付けることができたかということ振り返ることによって、子どもたちがさらに学びを深めていくことになる。
- このように、今日の会議を貫く考え方は、「子どもたちにどのような力を付けていきたいかを、子どもを含めたみんなで共有し、取組の結果を検証し、身に付いたものを生かして、改善を図っていく。」という大きなベースラインを再認識する必要があるということ、本会議に参加して強く感じた。
- 令和8年度の方向性として、「キャリア・パスポート」の効果的な活用が挙げられているが、一部の先生方には、この取組を負担に感じている方もいると思う。このことについて、国立教育政策研究所が1月30日付けで発出した「「令和7年度キャリア教育に関する総合的研究」 第一次報告書（以下、第一次報告書という。）」に記載がある。

生徒調査では、「キャリア・パスポート」を使った授業の実施に関する意識について、「キャリア・パスポート」を使った授業を、これからも受けてみたいと思う」と肯定的に考えている生徒は77.0%であったのに対し、学級担任調査では、「「キャリア・パスポート」を使った授業をこれからもやってみようと思う」と肯定的に考えている学級担任は52.9%にとどまっている。「キャリア・パスポート」の活用に関しては、学級担任と生徒との間に活用に関する認識の差異が見られる。

このことに関しては、第一次報告書に、次のような記載がある。

学級担任調査において、「キャリア・パスポート」の活用に積極的な学級担任は、活用に消極的な学級担任と比較して、「学級活動（3）「一人一人のキャリア形成と自己実現」で活用している」、「記録をもとに教員と児童との間で対話をしている」、「児童が体験活動を振り返る際に活用している」、「児童が目標を設定する際に活用している」割合がそれぞれ21.5、13.7、12.8、12.3ポイント高い。「キャリア・パスポート」の活用に消極的な学級担任は「キャリア・パスポート」を多様な方法で活用した経験が少ないことが、効果を実感できていない状況につながっていると推察される。

つまり、キャリア・パスポートを使う前から負担感を感じて、いわゆる「食わず嫌い」をしてしまっている状況にあるということである。実際に活用してみると子どもたちの表情が変わる、理解度が変わるといえるのが、この「キャリア・パスポート」といえる。第一次報告書などを使いながら、「キャリア・パスポート」の効果について広める取組を進めてもらいたい。

- 課題として、「保護者や地域との共通理解」、「児童生徒の力に結びついているか、効果を感じられているか」が挙げられているが、これについては、先ほど挙げたベースラインの話であり、めざす子ども像の共通理解と実践検証のプロセスを構築することが重要といえる。
- 次期学習指導要領がめざすところは「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる 民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む」である。「自らの人生を舵取りすることができる」については、正にキャリア教育に期待されているところである。「民主的で持続可能な社会の創り手」については、「人間関係形成・社会形成能力」であり、相模原市でいうところの「つながる力」の育成である。また、「みんなで育む」については、相模原においては「縦の接続」、「横の連携」であり、相模原市が求めている「さがそうみらいプロジェクト」の理念は次の学習指導要領の理念と一致するところといえる。

5 その他
特になし

6 閉会